① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第35巻 第9号　1990年9月25日　大町山岳博物館

ゾン（野生ヤク）の死骸　羌塘無人区にて　撮影　西田　均

チャンタン高原逸話

西田　均

羌塘（チャンタン）高原。中央アジア探検史に重要な位置を占めるチベット高原北西部の広大な大地である。ニンチェンタンラ山脈、コンロン山脈、カラコルム山脈、ヤルツァンポー河に囲まれた平均高度四五〇〇mとも五〇〇〇mとも言われ、日本列島を全て入れても余りあるこの地域の全容は未だ解明されてはいない。

今春、この高原を三〇〇〇kmに亘って車で踏査し最奥部に鎮座する未踏峰蔵色崗日（ツァンスカンリ）（六四六〇m）の登頂を目指す「長野県山岳協会チベット登山協会合同登山探検隊」に隊員として参加する機会に恵まれた。

羌塘高原は、青蔵公路の要所安多（アムド）～色林錯（オーリンツォ）～洞錯（トンツォ）～獅泉河（シーチュエンホー）への東西ラインで南北に分けて考えることができる。南側は幾多の外国人が公式、非公式に入域している地区であり、北側は羌塘無人区とも呼ばれ、今回の入域はスウェーデン人探検家スウェン・ヘディンが一九〇六年冬期に禁断の都と呼ばれたラサを目指し密入域して以来、外国人としては二度目の入域となった。

私たちは、辺境の遊牧民とその遊牧民すら拒む完全な無人地域、野生動物が駆け巡る大地を夢想していたのだが、結果は予想を裏切るものであった。遊牧民はかなり奥地まで牧草を求めて入り、チベットノロバ、チュルーの群は大きなものでも二百頭余に過ぎず、ゾン（野生ヤク）に至っては全行程を通じて五～六頭を目視したに留まった。高原のあちらこちらに、刃物で切り落されたゾンの頭部が打ち捨てられている現実がそこにはあった。

敬虔なチベット仏教の信者である原住民が生命ある物を殺すはずもなく、異教徒による組織的な密猟であろうと推測された。人間の営みを拒絶するとまで言われた大地も、野生動物安住の地では無くなってしまったのだろうか。

私たちの遠征終了後、羌塘無人区は再び外国人入域禁止地域に指定されその扉を閉じた。

そして、羌塘高原を世界最大の自然保護区にしたいというニュースが伝わって来た。

（大町山の会・山岳博物館友の会）

槇 有恒先生を憶う（前）

丸山 彰

はじめに

日本の近代登山の育ての親である槇有恒先生が、立派な足跡を沢山残されて、昨年五月二日、心筋梗塞のため九五歳の生涯を閉じられた。天寿を全うされたとはいえ、哀惜の限りで追慕の念は深まるばかりである。

岳聖という言葉があるとすれば、先生にこそ最もふさわしい言葉であると思う。生涯山を愛し尊び山に生き、人を愛した温かい巨きい方であった。その柔和な温顔に接しているとどこに厳しい登山をしてきた強さがあるのかと不思議に思える程、穏やかで優しく謙虚な方であった。

先生の立派な足跡については多くの方々の知るところであるが、私は幸い昭和二一年（一九四六）初めて謦咳に接して以来ご交誼を頂戴してきたので、そのご交誼の中や書かれた文章をお借りし時に従って、業績を中心に偉大なる先生に近づいてみたい。

槇先生　文部省登山研修所にて　S42.8

少年期

明治二七年（一八九四）仙台で生まれた後、父上の仕事の都合で神戸に移ったが、小学校四年生のとき、再びの転勤のため、学校を余り転校するのはよくないと兄上と二人仙台の叔父さんの家に預けられ附属小学校から第二中学校へ進んだ。家は市の郊外にあって、畑や林の多い土地であった。この時のことを『私の山旅』（岩波新書）にこう書いている。

「家の前の小川にはフナもいたし、道の両側は春には野バラの花盛りであった。近所の寺の森には狐がいて、冬の夜などよくその声を聞いた。私の日常は町の繁華なところとは縁もなく、仲間との遊び場は自然に近くの野山であった。……林あり、川あり、原ありと変化に富み、その奥は次第に山が大きくなって奥羽山脈にまで続く山並である。この広大な自然の遊び場は、今から思えば贅沢なものであった。当時の弁当といえば梅干を入れた握り飯を腰に下げて、歩き廻るのであった……天気でさえあれば野外を駆け廻った。……どんな林にはどんな茸が生えるとか、どこの谷には雉が集っているとか、蛇はどんなところを好むとか、秋の渡り鳥の通る路とか、鈴虫はどこの原に多くいてとり易いとか……この辺りの山々の小さな主人になり切っていた。……私たちはただ野山が楽しかったのである。」この体験が生涯の幸福となったといわれる。

その後一二歳で富士山に登るなどし、一八歳で白馬岳へ登り、大きな感動をうける。明科駅で汽車を降り馬車に乗って大町に着き、対山館に泊り百瀬慎太郎氏の親切をうけた。更に馬車で四家に行き白馬館に泊り、翌日、白馬尻の岩小屋に夜を明かして雪渓を登った。大きな山への最初の登山であった。

先生（中央）と小方全弘氏（その右）筆者（左端）ら
立山へ向かう途中、扇沢にて　S46.8

峰と谷

先生の人生には三つの峰と一つの谷があるといわれる。峰はアルプスのアイガー東山稜の初登攀（一九二一年）、カナディアンロッキーのマウント・アルバーターの初登頂（二五）、ヒマラヤ・マナスル初登頂の指揮（五六）と谷は立山・松尾峠の雪の遭難（二三）である。

アイガー東山稜

長じて慶応大学に進学、山岳会を創り北アルプスの峰々に足跡を残し、卒業後はイギリスのウェストン師の勧めにより、スイスに渡り、登山基地グリンデルワイトに落ち着くことになった。大正八年（一九）のことである。

宿アドラーの窓から見える山々に驚嘆し憧憬した。アルプスの栄光といわれる夕映えは幻想的、壮厳であり、初めて見る氷河の姿はただ驚異でさえあった。中でも数千メートルの断崖をもって聳えるアイガーに強く惹かれた。特にその東山稜は、五〇年に亘って英・独・墺・瑞の四ケ国の優れた登山家が一二回試みたが、人を寄せつけない山稜である。この山稜に魅せられ、心をかりたてられ、いつか登りたいと心に期し、諸峰を登り腕を磨いた。二年間をかけての研鑽の結果、優れた技量は村中に知れるようになった。

いよいよ登攀を決意し、屈指の名案内アマター、ストイリ、ブラバンドに相談、マキならと決行することになったが、残された案内の家族たちの心配は並々ならぬものだった。

大正一〇年（二一）九月九日出発、一〇日最も難しい二百メートルの急峻で、幅の殆どない懸崖にとりかかり、朝九時から午後五時まで八時間の苦闘のすえ遂に、登り切った。下山した一行を迎えて、村は興奮に湧いた。マキへの賞讃と祝福に湧き、登山家マキの名が世界に広がった。

その年、登山の考え方、用具、技術など沢山の土産を持って帰国し、各地で講演。わらじ、着ござ、脚絆の従来の登山は、ルックザック、ザイル、登山靴などを用いての新しい登山に変っていった。

立山の遭難

次に一つの谷といわれる立山の遭難がある。

大正一二年（二三）正月、板倉勝宣、三田幸夫、槇の三名は、山麓で佐伯平蔵はじめ案内衆一〇名を雇って雪の立山に向かった。

六日、芦峅寺を発ち立山温泉（廃墟となり

今はない）に入り、吹雪で停滞。一五日、立山に向かう。輪カンで難行する案内を帰し、一ノ越を目指したが、吹雪のため引返し帰途についた。

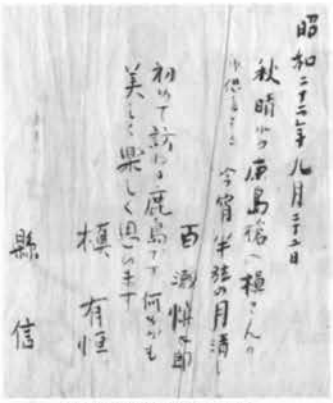
目指す松尾峠（温泉の近くの峠）は見つからず、夜を迎えた。一六日、依然として何れの尾根が松尾か解らず、夜になる。この時板倉の疲労甚だしく、一七日午前零時五七分、この世を去った。壮絶を極めたわが国初めてのスキー登山の遭難であった。

その年七月、傷心を超えて、今まで書き溜めた論文、随想、登高記に立山の遭難を加えて、改造社から『山行』を上梓した。

この本は、わが国山岳図書のなかで屈指の名著といわれ、広く日本文化史上意義を持つ書物と高い評価をうけた。この名著が若冠二九歳で発刊されたとは唯々敬服のほかはない。

マウント・アルバーター

大正一四年（一二五）には第二の峰といわれる、カナダのマウント・アルバーターの初登頂がある。早川種三、三田幸夫ら六人で組織した日本山岳会登山隊による初登頂であった。この山は広大な氷原と斧を知らない深い森林におおわれて立つ険しい断崖の未踏の山であった。



狩野家の『登高帳』から
（本紙第32巻　第3号参照）

翌一五年（一二六）には乞われて秩父宮殿下をご案内し、アルプスのヴェッターホルン、グロッセシュレックホルン、マッターホルン等の諸峰と日本の山々を登った。殿下とは親交厚く、殿下を「生まれたままの純粋な人間らしい方で、何を申しあげてもそのままご信じになり、人を疑うことなどできない頭のさがる立派な方だった」と筆者によく語られた。

大町時代(一)

戦争の色が濃くなって南洋拓殖などの仕事を務め終戦を迎えた。終戦間際、横浜の空襲で家や家財や最も大切にしていた蔵書を失い、その上国策の拓殖事業に携わったことで、公職追放の憂き目にあった。

奥様とご予息恒治さんの三人は手捉荷物で軽井沢に移ったが、半年で百瀬慎太郎さんの世話により大町に移り住むことになった。

日本山岳会々報「山」（四六年四月号）に山村よりと題して次のような手記がある。

大町で講演をした夜の懇親会
百瀬家、降旗家の方々を囲んで　S49.11

「戦災のため図らずも信州の山里に住むことになった。……十月に降った豪雨のため途中の鉄道故障が甚しく十一月を迎えても復旧せず峠路に雪が来ぬ内にと月半に急にトラックに乗って引越すことになった。

強い北風が冬枯れの高原を吹き渡るよく晴れた日であった。小諸の街を通り抜けて上田への野道を下る辺であったろうか、石の多い坂道に沿った村は閑散として美しい……遠方に眼をやれば一連の鋭い雪の山脈が凍てついたように西の空遙かに高く波打っている。大町から態々迎えにこられた百瀬さんが、あれは鹿島槍だ、その隣が祖父だと教へた。あ、その山々に近く住もうとして今走っているのだ。安住の家を失ってからは転々として移り歩いたのであったが、今度は気持が落付いて暮せる所に行けるのだという親しい感情がその雪の山を見ていると泌々と湧いてくるのであった……」それから、予め百瀬さんがお世話した大町の郊外、常盤村仏崎の降旗造酒衛（屋号正）さんの離れ屋に住むことになった。この時のことを、

「追放というレッテルは私の身分に決定的な変化を齎らし、私の前に何処も門戸を閉ざされた。ただ大町の人々は私たち一家を温く迎え入れてくれた」と『私の山旅』に書いた。

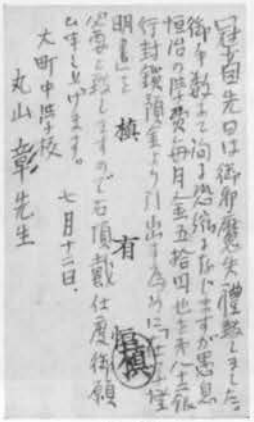
二一年（四六）四月、私の勤める長野県大町中学校へ恒治さんが入学し、図らずも私の担任の生徒となった。私はこの時からご交誼を頂ける幸運に恵まれた。

敗戦による窮乏の時であったが、大町の対山館に百瀬さんを訪ね、配給の酒を酌み、木崎湖に釣糸を垂れ、うつぎが紅に美しい八方尾根にわらびを摘み、高瀬の川原に初茸を探すなど、傷心の中にも都会にはない大陽や星や雨を身近にしたご一家の安息の日々があった。吹雪の荒れる日、川原の深い雪をおかして中学校へ通う恒治さんを望遠鏡を手にして気遣う、子を思うよき父であった。

私の手許に、私宛の珍らしい名刺が残っている。「冠省先日はお邪魔失礼致しました御手数にて洵に恐縮に存じますが愚息恒治の学費金五拾円也を八十二銀行封鎖預金より引出す為に「在学證明書」を必要としますので右頂戴仕度お願い申し上げます　七月十二日」

恒治さんには次のような思い出がある。彼は成績よく、利発で礼儀正しい少年であった。戦後、初めて催された学校の文化祭の劇に「青い鳥」が上演されミチルの役に選ばれ、見事に大役を果たした。大町劇場で公演され、先生も百瀬さんと同伴でご覧になりご満足の様子だった。その時の髪は百瀬さんがとうもろこしの毛を染めて作り、衣装は百瀬さんの娘さんのものを使ったという。百瀬さんの熱の入れようは大変なものだった。

（つづく）

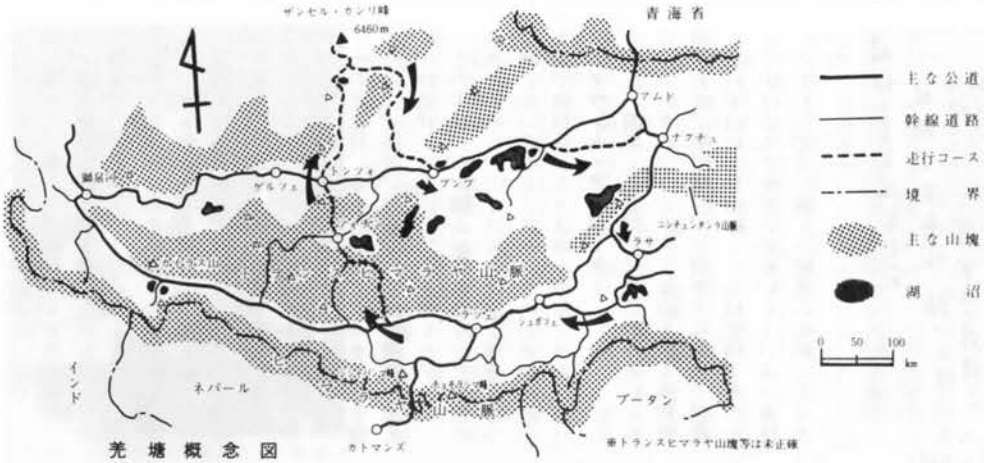


名　刺

（大町山岳博物館嘱託員）

チャンタン紀行（1）

西田　均



飛行機は、ごく当たり前のように四川省の首都成都を飛立った。

飛び立ってからしばらくすると、東チベットの白い山が見え始めた。「ここまで来るのに色々なことがあった。」と名も知れぬ山々を感慨にふけりながら眺めていた。

一年前隊荷をチベットに送り込んだ直後独立要求の騒乱、軍隊の投入と戒厳令、そして外国人入域禁止令が出され期限もわからない延期に追込まれてしまった。

「さぁ、行くぞ」という時だっただけに、虚脱感は大きく、準備が再開されてからも今一つ気力の充実が無いまま、ここまで来てしまったような気もする。

数日前には上海空港でのTVカメラ差押えという予期せぬアクシデントもあった。「遠征は既に始まっている」と誰かが言ったが、昨年のチベット戒厳令布告の時から今回の遠征が始まっていたのだとも思えた。

ヤルツアンポー河と茶色の山並が目に入ると、ほどなく飛行機はチベットの空の玄関口コンガ空港に着陸した。

三年ぶりに訪れたラサの街は、植樹された木々が若葉を付け陽光に輝き、自然環境は平和そのものである。しかし街の要所には銃を持った兵士が監視しており、入域は可能になったものの戒厳令が続いている緊張感が漂う。

チベット第一日は、ベッドで過ごすことになった。急激に三七〇〇mまで来たため、高山病の危険があるためだ。遠征を成功させるためにも健康管理には最初から細心の注意が必要となる。

翌日から出発準備が始まった。日本人はせっかちなのだろうか。「クリクリ（ゆっくり）」のチベット流に日本人隊員に少し苛立ちも見える。出発前日までかかって荷物の再梱包、通信設備の組み立てなどが進められた。

準備の合間を見て付近の山へ高度順化を兼ねたハイキングや市内の見学も行われた。

ラサは、やはり良いところだ。天に近いのか、街全体がチベット仏教の雰囲気で覆われている。観光用だとは言うものの寺院の仏像と充満するバター油の匂いの取り合わせは神々しいものがあるし、パルコルをはじめ街の活気には、すばらしいものを感じる。

ハイキングには登山道があるわけではない。放牧された羊やヤクが何百年もかけて刻んだであろう、山腹の無数の踏み跡を追って行くのである。高台から眺めるポタラ宮とラサの街並もなかなかすばらしいものがあった。

五月三日、私達はカタとチャンが贈られるチベット式の儀式の後、登山協会の関係者に見送られて羌塘（チャンタン）高原を目指して出発した。

今回のコースはラサから新蔵公路を西進した後、トランスヒマラヤを北上し羌塘高原の最奥部に位置する「蔵色崗日（ザンセル・カンリ）峰」で登山活動を行い、青蔵公路を経てラサに戻るというものである。

ラサを出発し一時間余、舗装道路は終わりカンパ・ラの峠越えとなった。四七〇〇mの峠からは目前にニンチェンカンサン峰の端正な三角錐が白く輝き、ヒマラヤへ来た喜びがひしひしと湧いて来る。

チベット閑話

★チベットの朝は遅い。北京時間とサマータイムで、日本と同じ時間帯を使っているため、8時過ぎにやっと陽が昇り夜11時頃までは明るい。

★ラサ出発が迫った5月1日昨春からの戒厳令が解除された。戒厳令解除に一番敏感に反応したのは外国人で当のチベット人は「今までと変わりは無い。」と殆ど反応を示さなかった。

（大町山の会・山岳博物館友の会々員）

カンパ・ラよりヤムドク湖とニンチェンカンサン峰及び筆者

山と博物館第35巻第9号
一九九〇年九月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二三〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）